

知的障がいをもつ言語レベル0の児童に対する日本語教育について

—知的障がい児に有効な教材教具—

近藤 夏美 (小牧市立大城小学校)

1. 児童の実態

Sは、特別支援学級知的障がいクラスに所属する、小学二年生の児童である。自閉症と知的障がいがあり、療育手帳はB判定である。入学当初は、言語レベルは0に等しく、話せる日本語は「あお、てえふ、せんせい、ぴかちゅう」の4単語であった。児童Sの両親はともに日系の南米人であるが、児童Sは生まれも育ちも日本である。家庭では主に親の言語を使っているが、その言語のレベルも日本語と同様であり、児童Sのコミュニケーションツールは主にジェスチャーであった。

2. 児童Sの障がい

自閉症と知的障がいを併せ持つ重複障がい児であるが、児童Sの障がいの中で一番重く感じられるのは言語障がいである。話す・聞く・読む・書く能力のうち、話す・聞く能力が極めて低かった。書く能力は比較的高く入学当初から文字は書くことができたが、概念がないため、文字としての意味を持たない児童Sにとっては絵を描くようなものであった。

3. 目標

児童Sが、小学校6年間で達成してほしい長期目標を二つ設定した。

- ① 児童Sが、簡単な単語や動作語を使って、自分の思いや意志を表示できるようになること。
- ② 児童Sが、文字を習得し、簡単なことばの読み書きができるようになること。

4. 実践の概要

4. 1. 語彙を増やす学習と清音の学習

まずはじめに、児童Sの周りにある物の名

前と、児童Sがよく行う行動の中で、比較的簡単な単語(2~3音の清音)について、単語カードを用いて学習した。このとき、文字が単語の名前を示すことを理解させるため、文字と絵が一緒に見える単語カードを作成した。単語練習を家庭でも毎日取り組んでもらうようお願いをした。一学期は文字には触れず、ひたすら単語カードを見せながら教師の後に反唱させることを繰り返した。一学期は2音の清音でも反唱が難しい単語も多くあった。舌や唇の動かし方をしっかり見せながら訓練した。ある程度児童Sが話すことができる日本語の語彙を増やしたところで、文字についての学習を開始した。児童Sが使う単語の頭文字から覚えるように訓練した。「先生」の「せ」、「耳」の「み」、「目」の「め」。画数の少ない「し」や「つ」、「く」などの学習から始めるのが一般的だが、児童Sは書く能力については比較的高かったため、文字の学習を開始した時点で、ほぼ全てのひらがなを正確に模写することができていた。そのため、児童Sが比較的音を導きやすい文字から学習を開始することとした。それでも一つの文字の音を覚えるのに何ヶ月もかかった文字もあった。2学期と3学期を使って、文字の清音の学習を終了した。

4. 2. 文字の概念を形成する学習

一通りひらがなの清音の学習を終えた所で、文字で単語を構成する学習を行った。児童Sが知っている物で、発音できる単語に限定し、単語の名前を一音一音発音しながら50音表から文字を選択した。50音表も、児童Sが音を導きやすい絵を載せた50音表を個別に作成した。

50音表から文字を選び単語を作る活動



選択した後、ワークシートに書く作業を行った。繰り返し行うことで、2年生の1学期までに2～4音程度で構成される単語は、ひらがなを正しく選択し、書くことができるようになった。

4. 3. 濁音・半濁音・促音・拗音の学習

2学期から、濁音・半濁音の学習を開始した。清音の時と同様に、児童Sが普段使っている単語の頭文字から覚えるように指導した。

3学期には、促音の学習と、拗音の学習を行った。拗音の学習は、「し」と「や」を早く一緒に読むことで「しゃ」と発音させようと試みたが、「や」を言っている途中で「し」を忘れてしまった。そのため学習方法を変更し、清音と濁音・半濁音の学習の時と同様に、児童Sが普段使う言葉の中から、その頭文字で覚えさせることとした。この学習方法の方が、児童Sには合っており、約1か月程度で定着した。

4. 4. 文章を読む・書く学習

ひらがなを全て習得したところで、簡単な文章を読む学習をはじめた。その活動が、今現在取り組んでいるものである。歴代の教科書や絵本などから、ひらがなのみで構成されている物語文や、誌などをピックアップし、児童Sに合うように改良して教科書を作成している。動作化をさせることで文字を読むことを楽しみ、暗記させることで実生活でも使えるようにしたい。視写や挿絵を描くなど、自分の教科書をノートにおこす活動も行っている。

4. 5. 語彙を増やす学習と文章を作る学習

この頃にも、引き続き児童Sの語彙を増やすために色々な単語や動作語の学習を行って

いた。しかし、文字が読めるようになると、文字に頼ってしまい、文字と絵が一緒の単語カードを使うと、文字を読むため単語を覚えようとしなくなってしまった。このため、文字と絵が一緒には見えないような単語カードを作成し直した。文字を読むことが目的の活動と、単語の名前を覚えることが目的の活動と、目的に応じた単語カードを使用した。



1年生の最後に、自分の名前・物の名前・行動の名前を組み合わせ、意志を伝えることに自発的に成功した。2年生からは単語同士を組み合わせ、意志や状況を伝える学習を行っている。はじめは「児童Sの名前」+「行動の名前」(助詞なし)から開始した。現在は、「児童Sの名前」+「物の名前」+「行動の名前」(助詞なし)の学習を行っており、「だれが、なにを、どうした」の文を、絵カードを見て文を作ることができるようになった。

5. 現在の児童Sの目標到達度

①について、今では身の回りの物の名前、行動・動作語合わせて200単語以上習得している。現在も引き続き語彙を増やす学習を行っている。「だれが、なにを、どうした」の文は、数は少ないものの作れるようになってきている。もう少し数を増やしたところで、助詞の学習にも入っていききたい。

②について、完璧な定着までとは言わないが、ひらがな全般は理解している。自分が考えたことや思ったことなどを文字におこしたりすることはできないものの、簡単な単語や言われたひらがななどは、読んだり書いたりすることができるようになっている。3年生にむけて、音読の学習、カタカナや漢字の学習など、児童Sの成長レベルに合わせて引き続き学習を進めていきたいと思っている。